

わず、おとなしく従順である」とイギリス軍の統制方法を支持した<sup>43)</sup>。

フランスはイギリス軍ほど厳格に閉じ込める政策は取っていなかった。YMCAの報告によると、イギリス軍管轄の中国人労働者は「狭い混雑した地域に詰め込まれている」が、フランスの管轄下にある労働者たちは「より広いところに分散しており、出入りも自由である<sup>44)</sup>」。契約で法的な権利が保護されており、担当の中国人外交官が歩き回って各キャンプの様子を監視していたこともイギリスとの違いの要因であろう<sup>45)</sup>。しかし、フランスとの契約では、彼らは軍に属すのではなく民間の労働者であったが、他の植民地からの労働部隊と同様に、現場では軍隊式統制が行われた。出入りが自由といっても、できるだけ地元の住民との接触を避けるよう指令が出ていたのである<sup>46)</sup>。なによりも、フランスが中国人労働者を「中国人植民地労働者」とよび、植民地軍を統括する組織の中の植民地労働者組織局の管轄下に位置付けたことに注目すべきであろう。スペインなどヨーロッパからの移民労働者は外国人労働者局の管轄であるが、中国は植民地ではないにも関わらず、中国人労働者は植民地からの労働者と同等の扱いを受けたのである<sup>47)</sup>。

アメリカ軍は自軍の兵士であるアフリカ系アメリカ人部隊に関しても、徹底した隔離政策をとった。「黒人YMCA」の女性指導員のアディー・ハントンによると、「白人」兵は自由に街を歩けるが、アフリカ系アメリカ人兵はほんの短い距離でも許可をもらうことが難しかった。さらに、アメリカ軍は、アフリカ系アメリカ人兵の外出制限だけでなく、現地のフランスのレストランや娯楽施設にもアフリカ系アメリカ人兵を入れないように警告したのである。結果として、アフリカ系アメリカ人兵とアメリカ「白人」兵及び軍警察との衝突や発砲事件が、ブレスト、ボルドーなど各地で起きた。さらに、「白人」アメリカ兵は、アフリカ系アメリカ人兵に対してだけでなく、この人種意識をフランス社会で実践した。たとえば、ブレストでは、アメリカ兵によるフランス「黒人」への侮辱事件が何回も起き、

それが原因で、労働キャンプが閉鎖になったのである<sup>48)</sup>。

いくら戦時中とはいえ、「非白人」労働者のみが人種民族集団ごとに宿舎と労働の現場を往復し、そのあとは宿舎に閉じ込められている生活をみて、各国の兵士も、周辺の住民も人種が異なることの意味を意識せざるを得なかったのではなからうか。

#### 4. 声を上げる

労働部隊として戦争に参加した外国人労働者、特に中国からの労働者たちは、通訳が圧倒的に不足している中で、彼らを監督しているフランス、イギリス、アメリカ軍の下士官とほとんどコミュニケーションが取れず、ストライキあるいは暴動でしか意思表示の手段をもたなかった。あるYMCAの指導員は、1919年、14万人の中国人労働者とフランス語及び英語を話す下士官との間には、「大きな溝がある」と報告している<sup>49)</sup>。各地で多様な対立や暴動がおこっていたが、原因別に分類すると4種類のパターンがあるように思われる。まず、仕事場やキャンプでの待遇に関する抗議である。食料が少ない、労働条件が厳しいなどの処遇への抗議やストライキがフランスの各地の工場でなんども起きている。また、前線の近くでの労働は中国人労働者に恐怖を与え、脱走あるいは暴動に発展する例もあった。たとえば、1917年9月、ドイツからの絶え間ない砲撃を恐れて、中国人労働者が仕事に行くことを拒否し、連れ出そうとした軍隊に石やブロックを投げて応戦して死者が出る事態になった<sup>50)</sup>。

二つ目の要因として、監督している下士官の中国人労働者への対応が暴動を引き起こしたことがあげられる。1918年のYMCAの報告でも「中国人集団を現場で指揮している下士官は、中国語もオリエンタルの性格もほとんど知らない。結果として、彼らは奴隷を取り扱うように、酷い言葉を使って仕事を強制する<sup>51)</sup>」と指摘した。たとえば、1917年、あるキャン

プで 1000 人の中国人労働者を監督していた中尉が、暴力で統率しようとしたため、ストライキが起こり、中国人労働者たちは司令官を人質に部屋に閉じこもった。結局兵士が発砲し、死傷者が出たのである<sup>52)</sup>。また、YMCA の他の報告では、コミュニケーションの不足だけでなく、中国人労働者が、軍隊の法律に柔軟性がなく融通がきかない事に怒りを感じていたことも要因だと述べている<sup>53)</sup>。とりわけ、イギリス軍の統制の厳しさは多くの暴動事件を誘発した。たとえば、1917 年 9 月、フォンティネットの中国人労働キャンプで、イギリス軍兵士の「理不尽な」言動に対して暴動が起こり 4 人が死亡した。その後イギリス軍が中国人労働者を鎮圧し、暴動の首謀者を投獄する事態となった。また、中国人労働者がイギリス軍管轄の労働キャンプからフランス軍下の労働キャンプに逃げ込むこともあったという<sup>54)</sup>。厳しい統制はイギリス軍だけではなかった。アメリカ軍においても、フランス軍においても、暴力で従わせることは日常茶飯事であった。1919 年には、1500 名の会員をもつ在仏中国人労働者総連合<sup>55)</sup>が組織され、言葉で声を上げることを学んだ中国人労働者たちは、フランス当局に対して「フランスにいる中国人労働者の訴え」を提出した。「私たちは、来た時から虐待を受けている。……むち打ちを受けないように」怯えていると訴えたのである<sup>56)</sup>。

第三の暴動の形は、周辺住民や職場の民間労働者を巻き込んだ形である。周辺住民との不和だけでなく、工場におけるフランス人労働者との摩擦が暴力事件に発展することもあった。中国人労働者の契約に際して、フランス政府はフランス人労働者と同等の賃金を約束し、1917 年には、軍需産業のストライキを禁止する代わりにフランス人労働者に対して賃上げをした。しかし、実際には移民や外国からの契約労働者が安い賃金で働き、一方で物価が上昇、食料も不足する中で、労働者間の緊張が高まっていたのである<sup>57)</sup>。たとえば、トゥーロンで、フランス人労働者と中国人労働者が対立し暴動となった<sup>58)</sup>。なお、住民との摩擦は中国人労働者だけの間

題ではない。たとえば、1917年のモンテローでは、休暇中のフランス人兵士と住民が工場で働いているアルジェリア人とモロッコ人の労働者を襲撃している<sup>59)</sup>。

第四の要因は、植民地労働者や中国人労働者の人種民族間の対立である。それぞれがほぼ出身地別に組織されていたために、利害の対立が容易に人種民族間の対立に発展したのである。たとえば、1918年4月には、マルセイユで中国人労働者と北アフリカの労働者が食料をめぐる衝突した<sup>60)</sup>。ただし、中国人だけが騒動を起こしていたわけではない。セネガル人とアジア系諸民族との対立、アジア系諸民族内での対立など多様な事件が報告されている<sup>61)</sup>。

中国人労働者や植民地出身の労働者たちのこのような意思表示に対し、各労働キャンプの現場では力で解決しようとする傾向が強かった。事件が起きると、各キャンプの監督やそれぞれの労働者管理の部局は武器を使って鎮圧し、首謀者には刑罰を与えた。フランス当局から厳しいと批判されたイギリス軍は、かえってフランス軍にたいして、厳格な秩序の必要性を説いた。いっぽう、自軍の管轄下のキャンプでは、夜間の外出禁止を徹底し、予告無しの点呼などをおこなった。また、自軍の兵士に対しては「中国人と話をすることを禁ずる」という指令を出している<sup>62)</sup>。1917年10月には、待遇の差などの不満を募らせないように、同じような仕事している「白人」労働者と中国人を一緒にしないなどの指令を出した。この指令に関して、イギリス軍司令部が意識しているかどうかは別にして、「白人」という言葉を使っていることに注目する必要がある<sup>63)</sup>。

アメリカ軍の場合、中国人労働者に対しては指揮系統がより複雑であった。あくまで中国人労働者をフランス政府から借りているため、フランス政府と中国人労働者が交わした契約の条項を守るようにフランス政府はアメリカ軍に迫った。しかし、アメリカ軍は厳しい規律を求め、長時間労働で賃金も低く抑え、暴動を力で鎮圧しようとしたのである<sup>64)</sup>。YMCAも「ア

アメリカ軍は中国人労働者とコミュニケーションができず、ゆっくりしたオリエンタルスタイルに対してアメリカ兵は中国人労働者を急かして働かせている<sup>65)</sup>」と報告している。

戦争という非常事態だけでも不安であるのに、このような国内での騒動と異人種が直結することによって、フランス社会の外国人あるいは異なる人種民族への疑念と不安が増大することは必至であった。たとえば、ポリヴィルの司祭が信者とともに「なぜ、防衛手段を持たず、男性は徴兵されてしまったこの小さな村に、彼ら（中国人労働者）を集めるのか<sup>66)</sup>」という質問状をフランス政府に出している。フランス当局も、中国人労働者や植民地出身の労働者の身元確認を強化する指令を出した。1918年、フランスの戦争省の代表と地域の軍隊の司令官が地域コミュニティの代表から中国人労働者に関する不満を聴取した。同年の戦争省のレポートでは、中国人労働者の採用は失敗ではなかったのか、という疑問も出されたのである<sup>67)</sup>。

## 5. 人種認識とジェンダー

これまで論じてきたように、戦場における労働と人種の問題は深く絡んでいた。戦場における労働の大半を中国人労働者や植民地出身の労働者に担わせることは、人種民族の適性論によって正当化されてきた。しかも、その根底には英仏米に共通した人種認識があった。すなわち、植民地出身者や中国人労働者を「先住民」と呼び、彼らは「子供のように依存した状態」であり、命令に従う従属的な人々であるという認識である。一例だけあげておこう。中国人労働部隊を中国からフランスまで移動させる任務に当たったイギリス軍のダリル・クライン中尉は、一般的な人々の中国人のイメージは「信頼できない」「夜の暗闇でナイフをかざす」といったものだったが、このフランスへの旅を通じて、単純で素朴な「決して成長しな

い」「子供」であることが分かったと記している<sup>68)</sup>。ただし、休戦後の混乱の中で、中国人労働者が多い地域では、中国人労働者は「いつも微笑んでいる」というおとなしいイメージから敵対する「Chink」に変貌した。常態への復帰に焦る住民にとって、中国人労働者は戦争の記憶と直結したものである<sup>69)</sup>。

さらに、「非白人」の兵士や労働者とフランス人女性の親密な関わりや結婚が増加したという事態に直面して、イギリス、フランス、アメリカの当局は介入を試みた。アメリカの人種隔離政策は、フランスの「白人」女性とアフリカ系アメリカ人兵士との関わりに強い拒絶反応を示した。アメリカ軍司令部が、フランス軍に対して「黒人は白人女性を襲う可能性があるため、人種間の隔離が必要である」という秘密文書を送ったことはよく知られている。アメリカ軍はアフリカ系アメリカ人兵に対し、フランス人の家庭を訪問することやフランス人の女性に話しかけることを禁止し、特に労働部隊に対してカフェなどの公的な場所に入内すること禁じた。この指令を受けて、アメリカ軍警察は、フランス女性と話している、あるいはカフェに入ろうとするアフリカ系アメリカ人兵を検挙するなど、人種隔離の実施に躍起となった<sup>70)</sup>。YMCAのアフリカ系アメリカ人女性指導員のハントンは「黒人兵がフランス人女性と話しをしてはならないという指令は大都市からアルプスの山の上まで行き渡っていた」と指摘している<sup>71)</sup>。この異人種間の親密な関係にたいする「嫌悪感」は、ときにフランス社会にまで及んだ。たとえば、1919年、サンナザレで、複数の「黒人」兵（アフリカ系アメリカ人とは限らない）とフランス人女性が話しているところに白人アメリカ兵が発砲して暴動となったのである<sup>72)</sup>。

植民地からの労働者や中国人労働者にとっても、フランス人女性と出会う機会は前線の兵士よりもあった。どのように外出制限を行っても、労働者たちはカフェや売春宿に姿を見せたのである。YMCAの指導員は、約1000人の労働キャンプの様子を次のように描写し、労働者たちと現地の

女性との出会いの可能性を示唆している。「片側に、中国人の宿営地があり、反対側には、何も知らずに中国人のように宿営させられていたポルトガル人労働者の一団がいた。その周りには数件のカフェがあるが、そこでは飲酒、ナイフを持った暴力沙汰、売春が日常であった。道の向こう側には、100人の軍需工場の女性労働者の宿舎があり、彼女たちは日中は中国人と並んで火薬を作っていた<sup>73)</sup>」と。

アメリカ軍だけでなく、各国の当局も、中国人や植民地出身の労働者たちとフランス人あるいは「白人」女性との関係に神経を尖らせた。フランス政府は、インドシナ植民地出身の男性とフランス人女性の結婚の許可を求める件数が増加していることに危機感を抱き、介入しようとした。イギリス軍も「白人」女性と、特にアフリカ地域からの兵士との接触を禁止した。あるイギリス軍の中国人労働部隊指揮官は、「低い階級の白人女性」と接触することで中国人の「白人」に対する評価が低くなることを恐れると論じた<sup>74)</sup>。この「低い階級の白人女性」という言葉は、中国人と「白人」女性の結婚が望ましくないという主張とともに女性の側にも非があるとみなされていたことを示唆していた。YMCAも同様の立場を取っている。たとえば、マルセイユからアメリカ軍の基地に移動させられた中国人労働者たちがフランス人女性を伴っていたことに関して、YMCAは「これらの男性はフランス人女性から誘惑され、欲望に負けて墮落したのである<sup>75)</sup>」と報告している。中国人男性とフランス人女性の結婚が増えている<sup>76)</sup>ことに関しても「これらの女性たち（中国人とともに工場で働く）」は「低い階級の出身」で、「おそらく金銭目当てに中国人と働いている<sup>77)</sup>」とYMCAは指摘している。このように異人種間の親密な関係は戦時中、重要な関心事であった。ただし、通常、「白人」女性は守られる対象として論じられることが多い。「白人」女性も批判の対象となるのはなぜだろうか。上述の例の多くがイギリスやアメリカの言説であり、自集団の女性ではないことが理由のひとつではないだろうか。今後フランス社会の規範がどう

であったかを明らかにする必要がある。

## 7. 人種秩序のほころび

戦場における労働に植民地や中国の労働者を使用したことは、これまでの欧米中心の人種秩序あるいは人種認識のいわば当然の帰結であった。しかし、多くの人種民族がフランスで出会ったことによって、守るべき人種秩序にほころびが見え始めたのである。たとえば、『サタディ・イブニング・ポスト』紙は、1919年、フランスにきた中国人労働者たちは「中国で信じられていたほどには、白人は優越ではないことを学んだ<sup>78)</sup>」と指摘している。南アフリカ「黒人」労働者たちがフランスでの扱いに抗議したため、政治運動になることを恐れたイギリス軍は、南アフリカ先住民労働隊を解散して植民地に帰した。フランス政府も自国の植民地支配への影響を案じ、特に中国人労働者とインドシナ植民地の労働者との接触に神経を尖らせた。両者が反フランスの立場で連帯し、中国人がインドシナ植民地労働者にストや運動の組織化に関する情報を伝えるのではないかと案じたのである<sup>79)</sup>。

植民地出身の男性とフランス人女性の親密な関係及び結婚も、「白人」の「血」の問題ではなかった。フランス当局と植民地の担当官は、インドシナ植民地出身の労働者や兵士がフランス女性や家族を伴って母国に帰ることによって、植民地で生活しているフランス人女性の「尊厳」が脅かされることになると心配した。インドシナ兵あるいはインドシナ労働者とフランス人女性が結婚するということは、インドシナの男性にフランス人女性が従うことを意味する。その結果、植民地のフランス人女性の位置だけではなく、フランス人の優越性にもとづく植民地構造の危機を招くと植民地支配の当事者は危惧したのである<sup>80)</sup>。フランス当局は、フランス各地の市長や村長にインドシナ植民地出身の男性とフランス人女性のカッ



プルに関する情報を知らせるように命じ、結婚する前に男性を他のキャンプへ転出させるなどの処置をとった。それでも、結婚の許可を求める書類が提出されると、インドシナの伝統や生活水準の低さをフランス人女性の家族に説明して思いとどまるよう説得したのである<sup>81)</sup>。このような介入は、植民地の人種秩序の維持に功を奏したのであろうか。植民地の歴史を再検討する必要がある。

## 8. むすびにかえて

第一次世界大戦の戦場の労働者、特に、中国人労働者の存在は戦後、戦争の記憶の対象にもなっていなかった。パリに第一次世界大戦時の中国人の貢献を顕彰する碑が建てられたのは、ようやく1988年のことである。しかし、植民地からの労働者あるいは労働部隊やアフリカ系アメリカ人労働部隊を、兵士を中心とする部隊と並べてみると、第一次世界大戦という戦争が、総力戦で消耗戦であるとともに、何層にも重ねられた戦争であることが明らかになる。その重ねられた層の中で、戦場の労働者として最下層に置かれた人々の圧倒的多数は、「非白人」であった。欧米の「白人」の優越性に基づく人種秩序が、中国人労働者や植民地出身の労働者を、戦う訓練を受けさせないまま前線の近くまで押しやったといえよう。さらに、彼らの有刺鉄線で囲まれた宿舎での状況や意思表示としてのストライキと暴動は、これまで人種の異なる集団をほとんど見たことのないフランスの人々にとって、新たな人種認識の出発点となったと思われる。また、戦場での労働と異人種民族の出会いは、従来の人種秩序が生み出したものであるが、同時にそのほころびをつくるきっかけを与えたことは皮肉である。植民地の独立運動への動きやアメリカにおける戦後のアフリカ系アメリカ人の活動をも視野に入れると、第一次世界大戦は20世紀の世界の人種秩序、人種認識に新しい流れを加えたと言っても過言ではなからう。今後は、兵